



2015年からハロー山梨に出演させていただいています。一人芝居は、2017年から2019年に「蝉しぐれ小吉の泪」2021年に「苦海浄土」のゆき女役。今回、再び一人芝居です。以前の2作品は、辛くて悲しい役でした。今回は、笑いあり涙ありのお芝居で、初めての挑戦です。人生は、永いようで短いです。そして、一度しかありません。今日会った人とは、もう会えないかもしれない。一期一会の出会いの多いなか、亡くなるまで、夫婦というくくりで一緒にいるというのは、貴重なことであり、奇跡なのかもしれません。スパイスの効いた夫婦のコミュニケーション。宙に浮かんでいる夫婦の言葉を海辺にいる浜千鳥が探しています。どうぞ、浜辺に座って『北風と太陽』をお楽しみください。

道草の楽しみ

詩人 古屋久昭

地方にいて、地方にこだわらない純粋に芝居の面白さを提供し続けている藤谷清六さんが、久しぶりに一人舞台用の台本を書き上げた。それというのもチェーホフの「煙草の害」ならぬ「酒の害」という和歌で言えば本歌取りのような原作と似て非なる芝居である。「煙草の害」では講演者は男性だが、「酒の害」では女性に替えている。

酒の害をひとことで言ってしまうえば「体に悪い」と、ただそれだけである。これではつまらない。芝居では、本論からどんどんずれて、できるだけ、「ああでもない、こうでもない」と長ったらしく余計な饒舌言葉をこねくり回して、さらにこの際とばかりに夫へのうっぶん言葉も駆使してようやく、結論の「体に悪い」に辿り着くのである。観客としては、辿り着くまでの道草をたっぷり楽しむというわけである。また、最後、なぜ芝居の題名が「北風と太陽」なのかを解くのも楽しみと言えれば楽しみである。さらに演技派、伊藤和美さんの独演ぶりにも注目したい。



長く暮らしてきたふたりの物語

山梨県立大学名誉教授 坂本玲子



藤谷氏が送るふたりの物語。長く暮らしてきたふたりの間には「北風と太陽」のように相反する力が働いている。真反対の力、振子がふたりの間に揺れ続けてきた。時に大きく、時に小さく。愛おしさや憎しみも様々な色合いを重ねてきた。あまりに大きい振子の揺れはふたりを苦しめるが、そこで生まれるエネルギーによって揺れは止められなくなる。揺れの不在は考えられなくなる。

ふたりの間に散りばめられた、日々の出来事、やりとり、記憶、生を刻むこと、老いること……。裏切りも諦めも、喜びも哀しさも、風もひかりも、生活の匂いも全て、共有してきた。そんなふたりの物語、垣間見てください。

演出助手 渡邊英里子

舞台監督 山田寛幸

ご覧になった方によって、様々な解釈ができる演劇です。ご鑑賞いただいた後は、ぜひ他の方と題名の意味を話しあってみてください。更にお楽しみいただけるはずです。もちろん、藤谷ワールドも健在です。役者の演技にも注目！最後までお楽しみください。

開始2秒で物語に引き込まれ、流れるように話が変わり、最後に残るのは満足感。もう一度観たいと思わせる作品。藤谷清六さんの描く「北風と太陽」、伊藤和美さんの洗練された一人芝居、その両方が組み合わせられた、とても贅沢なお芝居です。

STAFF

演出助手／渡邊英里子 舞台監督／山田寛幸 音響／塚田 仁 ビデオ撮影／鷹野亮司
デザイン・制作／松永博美 プロデューサー／山本 眞樹